

石川県白山原生林におけるツミの繁殖

橋 映州¹・関 幸良²

ツミ *Accipiter gularis* は、北海道、本州、九州、沖縄の低い山の林で繁殖し、秋冬には全国的にみられる(高野 1980)。本邦で繁殖するタカ類の中で最も小型で敏捷性に富み、目につきにくいためか繁殖行動についての報告は多くない。梅村(1985)は狭山市入間川での繁殖、竹田(1989)は石神井公園での繁殖、平野ら(1988)は宇都宮市石井での繁殖、山口(1989)は東久留米市での繁殖を報告しているが、いずれも都市近郊または住宅密集地付近の林での繁殖例である。昨年(1989)、石川県白山国立公園内の原生林でツミの繁殖行動を観察し、多少の知見を得たのでその大要を報告する。

この付近の鳥相については、数回の調査が実施され、シジュウカラ類、キツツキ類、ウグイス、ミソサザイ、オオルリ、カケスなどの生息密度の高いことがわかっている。ツミも観察されているが、繁殖が確認されたのは今回が初めてである。これは石川県内でもはじめての繁殖記録である。

本報告をまとめるにあたり、金沢大学理学部の大串龍一教授、白山自然保護センターの上馬康生研究員、日本野鳥の会研究センターの樋口広芳所長よりご指導いただいた。厚くお礼申しあげたい。

調査地の環境と調査方法

今回、観察した営巣地は、白山国立公園内六万山湯の谷溪谷斜面で(標高約1050m)、一帯は高さ30m前後のブナ、トチ、サワグルミ、ヤマハンノキなどがうっそうと繁る落葉広葉樹の原生林である。湯の谷川砂防工事用道路が原生林内を横切り、巣は道路から約50mの距離のところであり、胸高直径およそ80cmのイヌシデの地上約20mの又枝上につくられていた。

4月29日から6月1日まで、巣より約50m離れた道路より観察し、以後、巣立ちまでは木の葉が茂り巣がみえなくなったので約40m離れた小喬木の陰より観察した。親鳥の行動については、周囲の樹間に注意をはらいながら観察した。5月3、4、5日、6月18、20、25日には、給餌回数や食物の種類などについて集中的に観察した。観察にはスポッティングスコープ(20~40倍)および双眼鏡(9×30)を使用した。写真撮影には望遠レンズ(700~800mm)を使用した。

結果および考察

4月29日、抱卵中のツミを確認して観察を続ける。6月3日、白い綿毛におおわれたヒナ2羽がふ化した。抱卵開始日の確認ができなかったため、抱卵日数は $35日 + \alpha$ であった。6月12日、ヒナ3羽を確認した。6月27日、3羽のヒナは巣から約50m離れたヤマハンノキへ移動し、親からもらった食物を自分でちぎっては食べていた。巣内育雛日数は24日であった。7月2日以後はまったく姿をみることはできなかった。

抱卵は、もっぱらメス親の役目であったが、メスが食事中やスギの生葉を運ぶ留守には、オス親が抱卵にあたった。しかし、その時間は40分を越えることはなかった。メスは抱卵中、体の向きをかえたり、くちばしで卵を動かしているような動作をした。メスの抱卵中や抱雛中は、オスはメスへ食物

1990年11月10日受理

1. 〒921 金沢市四十万町 イ 157
2. 〒924 松任市成町

を運んだ。メスの食事場所は、巣から離れた所であった。その場所は3か所ほどであったが、これは観察者を警戒してのことかもしれない。しかし、餌渡しは観察者から15~20mの近距離でしばしば行なわれた。

5月3日、巣から約50m離れた樹上でメスはオスから食物をもらって食べはじめた。その残滓より、とっていた食物はネズミであることがわかった。この付近で生息するネズミは、アカネズミ、ヒメネズミ、スミスネズミの3種であるが、種の判定はできなかった。5月6、11日の観察でもオスはメスへネズミを給餌した。

ヒナへの給餌はメスの役目で、オスが直接ヒナに給餌することは一度もなかった。オスが食物を捕えてメスへ渡し、メスが食べやすく料理をしてヒナに与えた。このルールは巣立ちまで続けられた。

6月12日、メスがヒナに与えている食物は小鳥であることがわかった。6月18日も、ヒナに与える食物は小鳥であることが確認された。この日、オスの給餌回数は10回であった。6月25日、たまたまメスが食物を落としたので拾得した。それは、シジュウカラの幼鳥であった。

観察中、メスによくスギの生葉を巣へ運んだ。これは何を意味するのか不明である。オスは、食物を運んできたとき必ず『キッキキキキ』と数回鳴いた。メスは、その鳴き声で巣を離れた。

観察日数、観察時間が不定期となり十分なデータを得られなかったものの、ネズミと小鳥類が食物として多数捕えられることから、これら食餌動物の生息密度が、ツミの繁殖に大きな影響をもつものと考えられる。幸い今回の繁殖は、国立公園内の原生林であったため、人為的な被害は認められなかった。今後も開発などによる大きな環境変化は考えられないので、繁殖は続行されると予想できる。今後は、さらに詳細なデータを積み重ね、その生態を究明する必要があるだろう。

引用文献

- 清棲幸保. 1954. 日本鳥類大図鑑. 講談社, 東京.
 高野伸二. 1980. 野鳥識別ハンドブック. 日本野鳥の会, 東京.
 高野伸二. 1982. フィールドガイド日本の野鳥. 日本野鳥の会, 東京.
 内田博. 1986. 猛禽類の巣の近くで繁殖する鳥について. 日鳥学誌 35: 25-32.
 平野敏明・石田博之・国友妙子. 1988. 住宅街で繁殖したツミ. Strix 7: 263-266.
 竹田嘉宏. 1989. 石神井公園でツミが繁殖. ユリカモメ 398: 10-11.
 山口貞子. 1989. 東久留米市学園町でツミが繁殖. ユリカモメ 398: 12-13.

Breeding of the Japanese Sparrow Hawk *Accipiter gularis* in a natural forest on Mt. Hakusan, Ishikawa Prefecture

Eishyu Tachibana¹ and Yukiyooshi Seki²

A pair of the Japanese Sparrow Hawk bred in a deciduous forest on Mt. Hakusan. The nest was built on twigs of 20m high from the ground. The nestlings were fed with mice and small birds for 24 days. This is the first breeding record of the species in Ishikawa Prefecture.

1. 157 Shimanto-machi, Kanazawa-shi, Ishikawa 921
2. Narimachi, Matto-shi, Ishikawa 924